

ふるさと再発見 第37回

Re-discovery Omihachiman

近江八幡偉人伝 ⑩
商人から教育者へ ― 口話法聾教育の父 ―

西川吉之助

新年あけましておめでとうございませす。今回は、西川甚五郎

家同様、近江八幡を代表する商家でありながら、私財を投じて昭和初期の聾教育をけん引した西川伝右衛門家の10代目、西川吉之助を紹介しませす。西川伝右衛門家は、江戸時代に北海道へ進出し、松前藩で運上金の上納を条件に、浜（場所）ごとにアイヌ人との漁場経営を商人に請け負わせた「場所請負」で財を成した八幡商人です。

吉之助は、明治7年（1874年）、魚屋町元の肥料商で西川伝右衛門家の分家・善六家に生まれました。明治31年、本家・伝右衛門家に養子に入り、10代目当主となりますが、彼を商業から教育の道へ進ませるきつ

けとなったのは、三女・はま子の存在です。

はま子は、3歳になっても言葉を発することができませんでした。診断の結果、「聾」すなわち聴力に障がいがあることが分かりました。当時、京都に住んでいた吉之助は、京都盲啞院（現京都府立聾学校）を見学しました。同院で行われていた手話法に違和感を感じた吉之助は、同校教頭から口話法の文献の紹介を受け、猛勉強をしました。

大正9年（1920年）、吉之助は自己の研究成果をもとに、はま子の教育を開始。翌年、京都から仲屋町上の実家に引っ越して、教育に専念しました。発音や読話の練習を重ね、はま子

の言語理解能力は目覚ましく向上し、5歳のころには250語以上の読話と発音ができるようになりました。その後、吉之助はW・M・ヴォーリズの妻・一柳満喜子に、はま子の家庭教師のあつせんを依頼します。その成果もあり、はま子は昭和3年（1928年）、八幡町立高等女学校の入試に合格します。聴力に障がいがある女子が、一般の高等女学校に入学する全国初めての事例となったのです。

この間、吉之助は口話法教育普及のために、はま子とともに全国を行脚し、大きな反響を呼びます。その影響により、滋賀県議会では県立盲学校・聾学校設立の議案が可決し、昭和3年4月に、草津町大路井に滋賀県立聾話学校が設立され、吉之助は校長事務取扱に就任します（5年後に校長）。しかし、校舎は栗太郡農会の元養蚕室、机も椅子もない状態であったことから、吉之助は家財を惜しみなく注ぎ込みました。

吉之助の教育活動は高く評価されましたが、私財の持ち出しと本家の経営不振により、昭和11年秋、西川伝右衛門家は破産



雑誌「太湖」から西川吉之助追悼文の記事

します。伝右衛門家本宅は売られ、吉之助一家は、聾話学校前の借家に移り住みます。その後、次女の病死や長男と自身の病氣などから、吉之助の気力は著しく衰え、昭和15年7月に自ら命を絶ちます。

こうして、吉之助の人生は突然の終末を迎えますが、雑誌「太湖」での追悼文にもあるように、彼の精力的な口話法教育の普及に関する活動や献身は高く評価されるべきでしょう。また、はま子は大阪市立聾学校の嘱託職員となり、戦後は近江兄弟学園に勤務するなど、精力的に活動します。このようなはま子の活躍も、吉之助が残した成果といえます。

！ 新型コロナウイルス関連の情報は、市ホームページをご覧ください

新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、本紙掲載の催しが急に中止や延期になる場合があります。開催の可否は事前に担当課または主催者へご確認ください。また、最新情報は、市のホームページ <https://www.city.omihachiman.lg.jp/> で随時発信しておりますので、ご確認をお願いします。

人口と世帯 令和3年12月1日現在 ()は前月比

総数	82,106人	(-51)
男	40,340人	(-36)
女	41,766人	(-15)
世帯	34,731世帯	(-1)

※外国人住民(40か国・地域/1,592人)を含みます。

